

# 保育者養成におけるボディパーカッションを用いた リズム創作の有効性に関する一考察

長島 佳奈\*

## 要約

本稿は、子どもの歌を題材としたボディパーカッションによるリズム創作活動を通じて、学生の気づきや学びを明らかにし、リズム創作から打楽器演奏への移行が音楽的表現力向上に与える影響を検証することを目的とする。分析には、楽譜と創作過程の楽曲分析、自由記述の内容分析、振り返りシートの計量テキスト分析を用いた。

その結果、ボディパーカッションは音楽経験の有無に関わらず学生にとって取り組みやすく、主体的な協働力や音への感受性、創造性を育むとともに、自己表現力や共感力の向上が確認された。また、リズム創作の経験が打楽器演奏時の表現力や表現の幅を広げる上で有効であることが示唆された。

さらに、リズム創作活動を通じた協働的な学びの楽しさを体験することは、保育現場で子どもたちに豊かな表現活動を伝える力を育む手法として有効である。本稿の成果は、保育者養成や音楽教育における新たな指導法として活用可能性があることを示唆した。

キーワード：ボディパーカッション、リズム創作、子どもの歌、表現力、内容分析

2025年1月18日受理

## I. はじめに

### 1. 研究の背景と目的

『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』における領域「表現」では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」<sup>1) 2)</sup>と記されている。そして、『幼稚園教育要領』における領域「表現」の内容には「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする」<sup>3)</sup>、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」<sup>4)</sup>と示されている。また、『保育所保育指針』の領域「表現」の内容には、「音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ」<sup>5)</sup>「歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする」<sup>6)</sup>と記されている。

これらの内容から、幼児期の音楽表現活動においては、歌や簡単なリズム楽器の使用だけでなく、体の動きを取り入れた表現活動が重要であると考えられる。また、子どもたちの豊かな感性を育むためには、保育

者自身も音や音楽、歌から感じ取られるリズムや抑揚を、自身の体やリズム楽器などを媒体として表現する楽しさを味わう経験を積む必要がある。

本稿では、学生の音楽表現力やリズム創作力の育成に課題がある現状に注目し、ボディパーカッションを取り入れた授業実践に焦点を当てる。昨年度、O短期大学1年生の必修科目「音楽Ia(理論・声楽)」において、子どもの歌を題材に、打楽器を用いたリズム創作活動を実施した。学生のリズム創作過程を観察すると、楽器を積極的に鳴らす学生がいる一方で、楽器の使用に躊躇したり、「リズムが浮かばない」と悩んだりする学生も見受けられた。また、授業後に実施したアンケートでは肯定的な意見が寄せられた反面、「リズム創作が難しい」との課題も指摘された。これらの結果から、リズム創作活動においては、リズムの基礎パターンや構成を教授するだけでなく、子どもの歌から感じ取れるリズムを、より自由で気軽に体を使った表現を促すアプローチが必要であると考えられた。

そこで本稿では、ボディパーカッションを活用した

\*大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

リズム創作活動を通じて学生が得る気づきや学びを把握し、さらにボディパーカッションから各種打楽器演奏への移行過程が学生の音楽的表現力向上にどのように寄与するかを検証する。これにより、保育者養成における音楽表現指導の新たなアプローチを提案することを目的とする。

## 2. ボディパーカッションの概要と関連研究の検討

ボディパーカッションは、福岡県久留米市の小学校教師であった山田俊之氏が生徒とともに名付けた造語であり、体全体を打楽器のように使用してリズムアンサンブルを作り上げる活動である。山田氏は「楽器が苦手でも、楽譜が読めなくても、音楽は楽しめる」<sup>7)</sup>と述べ、体を使った表現による音楽体験の重要性を強調している。また、ボディパーカッションは児童の自己表現力、コミュニケーション能力、リーダーシップ能力の育成に効果があると述べている<sup>8)</sup>。

先行研究では、ボディパーカッションが表現力や協調性、責任感の向上に寄与することが示されている。佐藤（2008）は、中学校教諭免許状取得希望者を対象に、ボディパーカッション教材を用いた授業実践を報告し、創造的な表現や協調性の向上を観察した<sup>9)</sup>。また、ボディパーカッションに用いられるリズムは、各種打楽器への導入や歌唱・鑑賞教材との併用など、応用範囲が広がる可能性を示唆している<sup>10)</sup>。しかし、その具体的な実践例は十分に示されていない。

岡崎（2017）は、保育者養成におけるボディパーカッションの導入を通じて、集中力や協調性、責任感が養われることを示し、音楽教育の新たな可能性を提案した<sup>11)</sup>。さらに、山路（2022）は、リズム感の指導法としてボディパーカッションを取り入れ、体を動かしながらリズムを体感する重要性を指摘している。また、音楽が苦手な学生でも楽しみながら取り組める活動として、自己表現力や協調性、責任感の向上に効果があることを示している<sup>12)</sup>。

こうした先行研究では、一定の教育効果が示されているものの、既存の楽譜を用いた活動が中心であり、学生が主体的にリズムを創作する事例やそのプロセスは十分に検討されていない。また、ボディパーカッションから打楽器演奏への移行過程の有効性についても検証が不足している。

したがって本稿では、学生が主体的にリズムを創作し、ボディパーカッションを活用して表現活動を深め

る実践を提案する。また、ボディパーカッションから打楽器演奏への移行過程を分析することで、音楽的表現力の向上プロセスを明らかにし、学生の創造性や協調性、自己表現力の向上を図る教育的な価値を示すことを目指す。

## II. 研究方法

### 1. 研究対象となる授業

#### 1) 調査対象

本稿では、O短期大学において2024年4月および5月に開講された1年生必修科目「音楽Ia（理論・声楽）」を履修した学生23名（男5名、女18名）を対象に、ボディパーカッションの取り組みを実施した。学生の音楽経験は、ピアノ経験者10名、そのうち4名は打楽器や管楽器などの経験を併せ持っていた。一方、ピアノ未経験者は13名、そのうち1名は高校の部活動においてアカペラを経験しており、残りの12名はピアノ以外の音楽経験も未経験であった。

#### 2) 授業の概要

本授業は全8コマで構成され、筆者が単独で担当する授業科目である。読譜力および歌唱力の向上と、子どもの歌を題材にした表現活動の知識を養うことを目的に、理論と実践の両面から指導した。授業は90分で、前半45分は基礎的な音楽理論、後半45分は発声練習や歌唱活動を行った。視覚的教材や具体例を用い、導入方法を具体的にイメージできるよう工夫し、リズム遊びや楽器遊びを通じて表現活動への展開方法を実践的に学べる内容とした。

全8コマ構成の授業終盤にあたる6コマ目から8コマ目では、ボディパーカッションの活動を取り入れた（表1）。この活動のねらいは、①楽曲のリズムを強弱や音色を意識して表現する、②リズムの構成や変化を工夫する、③創作したリズムを打楽器演奏に応用す

表1 授業内容（6～8コマ目）

回	内容
1	まねっこリズム：体全体を打楽器にして鳴らすことに親しむ。ボディパーカッションのリズム創作：グループで子どもの歌を題材にリズムを考える。
2	ボディパーカッションのリズム創作の仕上げと練習：第1回で創作したリズムを練習する。打楽器での練習：ボディパーカッションのリズムを適切な打楽器に置き換えて練習する。
3	グループ発表と振り返り：創作したボディパーカッションと打楽器での演奏を発表する。発表の様子は録画し、演奏発表後振り返りを行う。

る、④創作や発表準備を通じて協調性やコミュニケーション能力を養うことである。

第1回（6コマ目）では、体の各部位を使ったリズム活動に親しみ、表現を楽しむことを目的に、山田（2018）が提唱する「まねっこリズム」の活動を実施した。これまでに体のさまざまな部位を使ったリズム打ちを経験していたため、強弱やたたく部位の変化にもスムーズに対応できていた。続いて、6人または5人ずつの4グループに分かれ、「アイアイ」（相田裕美作詞、宇野誠一郎作曲）、「おもちゃのチャチャチャ」（野坂昭如作詞、越部信義作曲）、「ドキドキドン！一年生」（伊藤アキラ作詞、桜井順作曲）、「とけいのうた」（筒井敬介作詞、村上太朗作曲）を題材に、オリジナルのボディパーカッションを創作する活動を行った。

第2回（7コマ目）では、各グループが創作したリズムを練習し、そのリズムを適切な打楽器に置き換える作業と練習を行った。打楽器は楽曲の雰囲気やリズムパターンに合わせて選定され、創造的な工夫が促された。

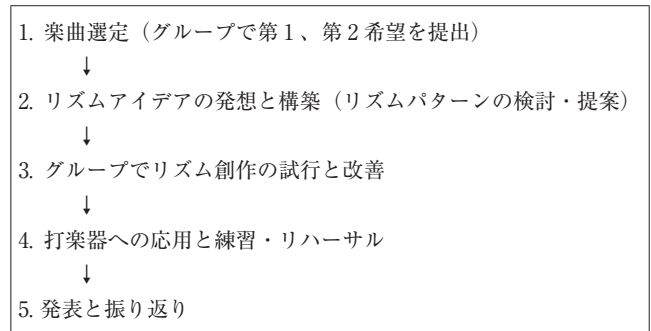
第3回（8コマ目）では、グループごとの演奏発表を実施した。発表はボディパーカッションと打楽器演奏の両方で行い、その様子を録画した。発表後には振り返りシートを用いて、創作や準備過程の成果や課題を考察した。

このように、3コマにわたる授業では、ボディパーカッションを中心にした創作活動と打楽器への展開を通じて、音楽表現における創造力や協調性を高めることを目指した。

### 3) ボディパーカッションのリズム創作の手順

リズム創作の手順については、以下のプロセスで進めた（表2）。

表2 リズム創作の手順



学生が主体的にリズム創作を進められるよう、筆者が作成したワークシート（図1）やリズムパターン例を参考資料として配布した。昨年度はリズムの自由創作を試みましたが、技能不足が課題であったため、今年度はリズム構築を支援するためのワークシートを活用した。ワークシートは楽曲を動機（モチーフ）や小楽節ごとに区切り、リズムを考えやすくした。また、リズムの反復や、前半と後半で対称性を取り入れるなど、一貫性を持たせる工夫を促した。

選曲は授業内で学生が自然に体を動かしたり、手拍子や応答が生まれたりした曲を中心に選定した。例えば、「アイアイ」や「ドキドキドン！一年生」は歌詞に合わせて動きを交えながら楽しむ様子が見られた。「おもちゃのチャチャチャ」では「チャチャチャ」のリズムに合わせて自然に手拍子を打つ場面が多く見られた。「とけいのうた」は、Aメロディーが8分音符やスタッカート、Bメロディーが付点4分音符や4分音符を中心とする構成でリズムの変化が感じやすかった。これら4曲を提示し、グループで希望を出して最終決定した上で創作活動を開始した。

リズム創作の支援として、筆者がピアノで録音した音源を各グループの代表がスマートフォンで再生できるよう準備し、学生は繰り返し確認しながら創作を進めた。また、指導では反復や対称性を取り入れる工夫について助言し、昨年度には見られなかった一貫性や創造性の向上が確認された。

「とけいのうた」～ボティパーカッションでリズム創作をしよう～  
グループメンバー（

**Aの部分（2小節創って繰り返す）**

*mp*

コチコチカッチン おとけいさん コチコチカッチン うごいてる

①			<b>×2</b>
②			<b>×2</b>
③			<b>×2</b>

※2小節のリズムパターンができれば、★は終わる感じに工夫してみよう（スコアに書く）

**Bの部分（2小節創って繰り返す）→Aと変化をつけましょう**

*mf*

こ ども の は り と お と な の は り と  
こ ども が ピョ コ リ お と な が ピョ コ リ

①			<b>×2</b>
②			<b>×2</b>
③			<b>×2</b>

図1 リズム創作する「とけいのうた」のワークシート

## 2. 研究対象および分析方法

本稿では、①学生によるボディパーカッションのリズム創作過程と演奏発表の実際、②グループごとに選択した打楽器の種類とその理由、および打楽器での演奏を通じて感じたこと（振り返りシートの記述内容）、③ボディパーカッションのリズム創作と演奏を通して学んだことや感じたこと（振り返りシートの記述内容）を研究対象とした。振り返りシートは、学生が自由に記述できる形式とし、回答しやすい環境を整えた（表3）。

①については、各グループが作成したボディパーカッションの楽譜（学生が作成し、筆者が清書したもの）と、リズム創作過程の様子を関連付けて楽曲分析を行った。また、演奏発表の際に観察された様子も記録した。楽譜と創作過程を関連付けることで、学生がどのようにリズムを構築したのかや、創作したリズムの特徴を可視化できると考えた。さらに、発表時の観察を通じて、練習の成果やチームワークの向上など、学生の学びを多角的に捉えた。この方法により、学生の創作活動を具体的かつ総合的に理解できると判断した。

②については、各グループが選択した打楽器の名称とその理由を表形式で整理し、選択基準や背景の意図を明確化した。また、ボディパーカッションで考案したリズムを打楽器で演奏した際の感想を自由記述形式で収集し、分析を行った。自由記述形式は、学生の感じたことを直接表現しやすくし、リズム創作と打楽器演奏への移行がもたらす効果や課題を具体的に捉えるうえで有効であると判断した。

③については、自由記述データの分析に計量テキスト分析ソフトKH Coder (Ver.3)を使用した。KH Coderを選択した理由は、学生の学びや気づきの傾向を客観的かつ体系的に分析し、語彙頻度や共起関係を視覚化することで、主観的な解釈への依存を避けるためである。

具体的には、語彙の出現頻度に基づく形態素分析により頻出キーワードを抽出し、共起ネットワーク分析によって語彙同士の関連性を可視化した。これにより、学生の学びや気づきの傾向を明確化できると考えた。

なお、②では演奏時の具体的な感想や選択理由を直接解釈することを重視したため、計量テキスト分析は行わず、自由記述の内容分析に重点を置いた。一方、

③では学生の抽象的傾向を体系的に整理する必要があったため、計量テキスト分析を用いた視覚化が有効であると判断した。

これらの分析プロセスの詳細を記録し、出力結果の再現性を担保することで信頼性を補完した。また、学生の記述内容を逐語的に確認し、解釈の一貫性を保つことに努めた。

表3 ボディパーカッションおよび打楽器の演奏発表後の振り返りシート項目

1. ボディパーカッションのリズムを打楽器に置き換えた際の質問 1) 打楽器を使ってボディパーカッションのリズムを演奏する際、どのような楽器を選びましたか。 それらの楽器を選んだ理由も書いてください（自由記述）。 2) ボディパーカッションから打楽器の演奏に移行した際に感じたことを書いてください（自由記述）。 2. ボディパーカッションのリズム創作をし、ボディパーカッションや打楽器で演奏することを通して、あなたが学んだことや感じたことを書きなさい（自由記述）。
--

## 3. 倫理的配慮

倫理的配慮に関して、学生には質問紙調査および振り返りシートの記述内容は授業評価に影響しないこと、個人情報匿名化されることを説明した。また、初回授業時に本研究の趣旨を伝え、論文として発表することの了承を全員から得た。

一連の取り組み内容とその成果について論文として発表することの了承を全員から得ている。

## Ⅲ. 結果

### 1. ボディパーカッションの創作過程における学生の姿と演奏発表の実際

ここでは、「アイアイ」「おもちゃのチャチャチャ」「ドキドキドン！一年生」「とけいのうた」の各グループが創作したボディパーカッションのリズムと、その過程での学生の姿を記録する。今回、グループごとの音楽経験には差が見られたものの、各グループはそれぞれの特性を活かしながら工夫を重ね、積極的に創作活動に取り組む様子が観察された。

特に、音楽経験が少ない学生も、体を用いた表現活動を通してリズム感を養い、創作活動への関心を高めている様子が確認された。このことから、ボディパーカッションは学生にとって取り組みやすく、音楽経験を問わず学びや気づきを得るための有効な手法であることが示唆される。

## 《アイアイグループ》

### 1) ボディパーカッションの創作過程における学生の姿

「アイアイ」のグループ（男子5名）は、アカペラやピアノの経験者が集まり、各自が意見を出し合いながら積極的にリズム創作に取り組んでいた。手や足を使ったリズム打ちや太ももをたたく仕草などを取り入れ、音や動きを工夫しながらリズムを組み立てていった。また、授業で記録したノートや楽譜を参考にしながら、記譜も正確にまとめることができていた。

譜例1は「アイアイ」の第5小節目～第12小節目におけるボディパーカッションのリズムを示している。学生たちは「だんだん音が増えていくイメージ」を表現するため、最初は4分音符を中心にシンプルな構成

とし、次第に8分音符を取り入れてリズムに動きを加えていた。

また、第8小節目では、猿の動きを真似して「ウキーッ」と声を出す表現を追加するなど、パフォーマンス性を高める工夫も見られた。さらに、第11小節目には休符を効果的に取り入れ、一瞬の静寂をつくることで再開部分を際立たせるなど、リズムの構成力や表現力の向上が示唆された。

### 2) 発表の実際

曲の冒頭では、「いち、に、さん、し」と掛け声を入れてスタートした。この掛け声は裏拍を意識して発せられており、その後のリズムも取りやすくなってい

譜例1 「アイアイ」の第5小節目～第12小節目におけるボディパーカッションのリズム

5

アイ アイ(アイ アイ) アイ アイ(アイ アイ) おさる さーんだ よ

① 手 手 手 肩 もも 「ウキーッ」 手  
(掛け声)

② 手 手 手 「ウキーッ」 手  
(掛け声)

③ 足 足 手 足 手 手

4分音符の刻みが中心となっている

声を出す表現

9

アイ アイ(アイ アイ) アイ アイ(アイ アイ) みなみのしまー の

① もも もも 手 手  
全パート休符

② もも もも 手

③ 足 手 足 手 足 手 足 手 足 手 足 手 足 手 足 手 足

8分音符の刻みに変化させている

た。5名とも自然に体を揺らし、笑顔で楽しそうにリズムを感じながら演奏していた。また、アイコンタクトを交わしたり、同じリズムをたたくメンバー同士で上半身を向き合わせたりするなど、互いの呼吸を合わせながら奏でている様子が伝わる演奏であった。最後の小節では、全員が手拍子と足踏みを連打し、全力で演奏を締めくくった。その姿に「アイアイ」のグループ以外の学生からも笑い声や拍手が自然に生まれ、パフォーマンスとしても非常に盛り上がるものとなっていた。

### 《おもちゃのチャチャチャグループ》

1) ボディパーカッションの創作過程における学生の姿  
 「おもちゃのチャチャチャ」のグループ（女子6名）は、体を動かすことが好きなメンバーが集まり、体のさまざまな部位を使ってリズム創作に取り組んだ。途中、振付に意識が向きすぎる場面もあったが、助言を受けて音の確認を意識し直し、再びボディパーカッションの創作を進めていた。

譜例2と譜例3に示すように、第1小節目から第4小節目では「チャチャチャ」のリズムを強調し、テンポよくリズムを刻む工夫が見られた。パート①では、

譜例2 「おもちゃのチャチャチャ」の第1小節目～第4小節目におけるボディパーカッションのリズム

譜例3 「おもちゃのチャチャチャ」の第7小節目～第10小節目におけるボディパーカッションのリズム

頭から足へと順にたたく動きが視覚的に面白さを生み出していたが、テンポを保つのに苦戦する様子も見られた。また、パート③では、膝と手の交互動作を取り入れて音に変化をつけたものの、リズムを取りにくく感じる場面もあった。それでも、掛け声を交えることで全体の一体感を高め、楽しさを重視した創作活動が展開された。

## 2) 発表の実際

曲の最初から最後まで、全員が笑顔で生き活きと演奏していた。①と②のパートは楽譜どおり、動きとリズムを一致させながら堂々と演奏していたが、③のパートは膝と手の交互動作が多く、途中でやや混乱する場面もあった。しかし、リズムを止めることなく演奏を続けたため、曲の流れは途切れることがなかった。「ハイ！」と掛け声を入れる箇所では、他のグループのメンバーも一緒に声を出し、場の雰囲気がさらに盛り上がった。たたく体の部位を細かく変える工夫は視覚的に面白かったが、体から出る音の響きの余韻はあまり感じられなかった。例えば、音が出やすい洋服や靴の素材を工夫することで、音の響きがより豊かになったかもしれない。

譜例4 「ドキドキドン！一年生」の第1小節目と第2小節目におけるボディパーカッションのリズム

## 《ドキドキドン！一年生グループ》

### 1) ボディパーカッションの創作過程における学生の姿

「ドキドキドン！一年生」のグループ（女子6名）は、当初は恥ずかしさを見せながらも、手拍子を用いて旋律のリズムを確認する活動から開始した。その後、「リズムのノリを良くしたい」という意見をもとに、3つのグループに分かれてリズム創作を進めるなど、試行錯誤しながら活動を発展させていった。

創作過程では、「明るい雰囲気のリズムにしたい」「音の数を増減させる」などの意見が出され、パートごとに工夫を加えながら全体を仕上げていく姿が見られた。具体的には、**A**の部分では8分音符を基調に軽やかなリズムを取り入れ、**B**の部分では4分音符や2分音符、付点4分音符を使った落ち着いたリズムを構成し、曲全体に流れとメリハリをつけていた（譜例4、5）。

さらに、終盤では8分音符と連打を用いて盛り上がりを出し、曲の雰囲気を引き締める工夫も見られた（譜例6）。練習を重ねる中で動きが大きくなり、自信を持ってリズムを表現する姿勢が育まれていた。

譜例5 「ドキドキドン！一年生」の第9小節目と第10小節目におけるボディパーカッションのリズム

譜例6 「ドキドキドン! 一年生」の第13小節目と第14小節目におけるボディパーカッションのリズム

13

ド ン と い け

足

手 もも

手 もも

8分音符と連打で盛り上がり演出

おなか

手+足

Detailed description: This musical score shows three parts for a body percussion piece. The top part is a vocal line with lyrics 'ド ン と い け'. The middle part is divided into two staves: the left staff is labeled '足' (feet) and '手 もも' (hands/hips), and the right staff is labeled '手 もも' (hands/hips) and 'おなか' (belly). The bottom part is labeled '手+足' (hands+feet). A circled note in the middle-right part is annotated with '8分音符と連打で盛り上がり演出' (8th notes and repeated notes for a climactic effect). A boxed section in the bottom part shows a rhythmic pattern of eighth notes.

## 2) 発表の実際

発表では、最初はやや緊張した様子も見られたが、練習を重ねた成果が発揮され、テンポよく体の部位を移行しながら安定した演奏を披露した。

①のパートでは、部位を変えるリズム構成が正確に再現され、音の響きも明確であった。②のパートでは、ピアノ経験者の2名が中心となり、手から肩への動きや

8分音符と8分音符の組み合わせ(譜例4)をスムーズに演奏していた。一方、③のパートでは足を使ったリズムにやや課題が残ったものの、全体の流れは途切れず、曲を通して演奏しきる達成感が感じられた。

発表後は、安堵と満足そうな表情が印象的であり、協力して創作したリズムを完成させる喜びが学生に共有されていた。

## 《とけいのうたグループ》

1) ボディパーカッションの創作過程における学生の姿  
「とけいのうた」のグループ(女子6名)は、全員がピアノや他の音楽経験がないグループで、当初は手拍子するのにも戸惑いが見られた。しかし、ピアノ伴奏と旋律のリズム(譜例7)を参考にしながらリズム創作を進め、次第に積極的に取り組むようになった。譜例8に示すように、前奏の2小節では、ピアノ伴奏の2分音符と旋律のリズムを取り入れ、第3小節目の②のパートと第4小節目の③のパートでは、旋律のリズムを2つのパートに分散させるだけでなく、たたく体の部位を頭から足へと変化させる工夫が見られた。また、Bの部分(第7小節目~第10小節目)では、ピアノ楽譜の左手部分における8分音符のリズムがボディパーカッションの③のパートに反映されていた(譜例9、10)。

譜例7 「とけいのうた」の第1小節目~第4小節目におけるピアノの楽譜  
(『こどものうた100』より筆者が写譜)

Detailed description: This is a piano score for the first four measures of 'とけいのうた'. It features a treble and bass clef with a key signature of one sharp (F#) and a common time signature (C). The first measure is marked 'mf' and the second 'mp'. The melody in the treble clef consists of eighth and quarter notes, while the bass clef provides a steady accompaniment of quarter notes.

譜例8 「とけいのうた」の第1小節目～第4小節目におけるボディパーカッションのリズム

mf mp

コチコチ カッチン おとけい さん

① 手

② 手

③ 手

旋律のリズムを参考している

左手のリズムを参考している

伴奏の左手のリズムが反映されている

腕

足

もも

おなか

旋律のリズムを参考している

譜例9 「とけいのうた」の第7小節目と第8小節目におけるピアノの楽譜（『こどものうた100』より筆者が写譜）

譜例10 「とけいのうた」の第7小節目と第8小節目におけるボディパーカッションのリズム

7

こ ども の は り と  
こ ども が ピョ コ リ

① 手

② お腹

③ 太もも

太もも

足踏み

原曲の左手のリズムが反映されている

## 2) 発表の実際

全員が音楽未経験者でありながら、リズムの打ち方や体の各部位への移行はスムーズで、繰り返し練習を重ねた成果が感じられる演奏だった。また、練習の際に筆者が「ピアノの楽譜に書かれている強弱記号も意識してみて」と助言したことで、ディミヌエンドなどの音量の表現にも意識が向けられていた。

発表は終始穏やかな雰囲気、演奏終了後には、自分たちでも控えめながらも拍手をし、達成感を味わっている様子が見られた。

## 2. グループごとに選択した打楽器の種類および打楽器演奏時に感じられたこと

### 1) グループごとに選択した打楽器の種類と選択した理由

表4では、各グループが選択した打楽器の種類とその理由、演奏時の観察内容をまとめた。

学生は、カホンやマラカス、ウッドブロック、タンバリン、カスタネット、鈴、トライアングルなど多様な打楽器を選択していた。選択理由として、「音が重くて厚い」「音の主張が強くない」「音が引き立つ」「音が通っている」「裏拍に合う音」「心地よい音」「目立たせたい音を鳴らすことができる」などが挙げられた。

表4 グループごとに選択した打楽器の種類と選択した理由

各グループの曲目	選択した打楽器の種類	選択した理由
アイアイ	カホン	・音が重くて厚いから土台にピッタリだと思ったから ・カホンを演奏したことがないので面白そうだったから
	マラカス	・音の主張がそこまで強くないので、合いの手に良いと思ったから
	ウッドブロック	・細かい音もはっきりと鳴らすことが出来るから ・音の高さを変えることができ、音楽に立体感が出るから
	タンバリン	・見た目も音も大きくて気に入ったから
	カスタネット	・細かい音も鳴らせるし、目立たせたい音を鳴らすことができるから
おもちゃの チャチャチャ	クラベス	・音が引き立っていたのと、リズムが取りやすかったから
	タンバリン	・「キラキラ」という歌詞に合った音だと思ったから
	鈴	・「チャチャチャ」という音に近いと思ったから ・音がほかの楽器より控えめで、優しい感じがして、他の楽器と調和すると思ったから
	たまごマラカス	・裏拍担当で、裏拍に合う音だと思ったから
	ウッドブロック	・木と木が合わさった音が好きで、木の音をそのまま感じるし、たたく場所によって音の高さが変わるから
ドキドキドン！ 一年生	マラカス	・明るい音で、リズムを刻むのが楽しそうだったから ・盛り上げるときに効果的だったから
	トライアングル	・音がとれているから、明るい雰囲気が表現できると思ったから
	鈴	・音色が好きだから ・鳴らす場所や演奏の仕方によっても音が変わるから ・リズムを鳴らしやすかったから
とけいのうた	鈴	・保育所に通っていたときに鈴を使っていたので、懐かしいと思い、取り入れたくなくなったから ・グループでタンバリンやマラカスを使っている学生がいて、その楽器に合う音だと思ったから
	タンバリン	・曲の雰囲気に合うと思ったから ・タンバリンを入れると曲に彩りが出て華やかになると思ったから
	たまごマラカスと オクタチャイム	・オクタチャイムの中にたまごマラカスを入れて回すと、心地よい音がして、その奏法も取り入れてみたいと思ったから
	ウッドブロック	・とけいが刻んでいる雰囲気の音だから

このことから、学生が楽器の音色や響きに注目し、曲のイメージや歌詞に合った“音”を意識して選んでいたことがわかる。また、複数の楽器の組み合わせや響きのバランスを考慮しながら、表現力を高める工夫も見られた。さらに、奏法による音色の変化を活かしたり、新しい楽器に挑戦したりする姿勢も示されており、打楽器の多様な可能性を探求していた様子が見える。

## 2) ボディパーカッションから打楽器の演奏に移行した際に感じたこと

学生に、ボディパーカッションで考えたリズムを打楽器で演奏した際の感想について自由記述で回答を求めた。以下に抜粋したものを記載する。なお、記述に誤字脱字や不正確な表現が見られた場合は、筆者が前後の文脈を基に訂正した。また、同様の内容を持つ回答については、筆者が具体性のあるものを採用した。以下、下線は筆者による。

- ・ 体でリズムを覚えているので、打楽器を鳴らすタイミングが掴みやすかった。
- ・ 体にリズムが染みついていたので、打楽器の時にノリノリでできた。
- ・ ボディパーカッションでリズムを取れていたため、打楽器での演奏がやりやすく感じた。
- ・ 体で一度リズムを覚えているので、打楽器で演奏したとき、同じリズムだけど、さらに強弱をつけるなどの工夫ができる余裕が生まれた。
- ・ ボディパーカッションのリズム創作と練習で曲の構成を理解できたので、打楽器では曲調を捉えて表情をつけて演奏することができた。
- ・ いきなり打楽器だと、楽器の特徴にひっぱられてしまうけど、ボディパーカッションから入るとリズムを理解してから鳴らすことができ、打楽器から出る音にも着目できて良かった。
- ・ 打楽器だと音の強弱の幅が広がり、抑揚をつけたり、より目立たせたい音を出しやすくなった。
- ・ 打楽器のほうが、盛り上がりやすく、色々な楽器の音が合わさって綺麗な音になった。
- ・ シンプルな音のボディパーカッションのあとに、打楽器を使うと鮮やかな音色に感じた。
- ・ 今後、ピアノなどを演奏する際にも、今回のようにリズムを体でとってから練習するのも楽しそうだった。

多くの学生が「体でリズムを覚える」ことで、打楽器演奏がスムーズになったと実感していることが回答から示された。また、体にリズムが染みついていたことで、打楽器の演奏に余裕が生まれ、強弱や抑揚の工夫が可能になったという声も多かった。このことから、ボディパーカッションを経て打楽器を演奏することが、より豊かな音楽表現につながる事が示唆される。

さらに、ボディパーカッションによるリズム創作は、曲の構成やリズム理解を深める効果も確認された。打楽器演奏に移行する際には、楽器の音色や響きに耳を傾け、曲調に応じた表情づけを意識する姿勢が見られた。このことから、ボディパーカッションは音楽表現力を高める効果的な手段であるといえる。

また、ボディパーカッションを経験した後の打楽器演奏では、音の調和や響きがより鮮やかに感じられたという意見も多く、演奏に新鮮さや深みが加わり、表現の幅が広がったことがうかがえる。

加えて、今回の取り組みをピアノなど他の楽器練習にも応用できると考える学生もいたことから、ボディパーカッションはリズム感や表現力向上に寄与する学習方法であり、他の楽器練習にも応用可能であることが示唆された。

### 3. 学生による振り返りシートの記述内容の分析

#### 1) 自由記述の分析にあたっての準備

本稿では、授業実践における学生の振り返りシートの記述内容を分析するため、まず、KH Coderの処理

によって分析対象とする語句を抽出した。分析の実際として、語句の出現率および抽出語同士の関連性を要約提示する目的で、形態素分析ならびに共起ネットワーク分析を実施した。

分析の手続きとして、抽出後リストや文書検索などから語の重要性を判断し、強制抽出語として「ボディパーカッション」、「ウッドブロック」を指定した。なお、使用しない語の指定は行わなかった。このようなKH Coderによる処理の結果、分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数である総抽出言語数は2,232語で、何種類の語が含まれているかを示す異なり語数は380語であった。

#### 2) 語彙頻度による形態素分析

自由記述について、抽出語がどのような頻度で出てくるのか傾向を把握するため、データファイルに含まれる語とその頻度を求めた。出現数を算出（3回以上）したところ、50語が分析対象となった。その出現頻度を表5に示した。

表5の分析から、「リズム」が最も頻繁に使用され、次いで「楽しい」や「思う」といった語も多く見られた。学生は「体を楽器として使うことでリズム感を体験できた」「リズムを合わせる楽しさを味わえた」と述べており、ボディパーカッションを通じて音楽への親しみや楽しさを実感していたことが確認された。また、「子どもたちに体で音楽を感じさせたい」といった記述から、この活動が保育現場での実践意欲にもつ

表5 抽出された頻出後（50語）と出現回数（3回以上）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
リズム	54	使う	12	知る	6	楽しむ	3
楽しい	26	協力	11	歌	5	強弱	3
思う	26	学ぶ	10	覚える	5	苦戦	3
音	24	違う	9	出る	5	今まで	3
合わせる	18	ボディパーカッション	8	場所	5	作る	3
体	18	一つ	8	大切	5	出す	3
演奏	16	感じる	8	聞く	5	創作	3
叩く	16	難しい	8	色々	4	動かす	3
自分	14	考える	7	活動	4	表現	3
音楽	13	子ども	7	今回	4	明るい	3
グループ	12	打楽器	7	初めて	4	練習	3
楽器	12	面白い	7	やり遂げる	3		
曲	12	人	6	歌う	3		

ながっていることが示されている。

次に、「音」に関する語では、「たたき方によって音が違う」「体の部位を変えることで音の多様性を発見した」など、音の特徴や変化への気づきが示されていた。これにより、学生は音への感受性を高めるとともに、他者の音を聴き取り、揃えるための集中力を養っていたことが示唆された。

さらに、「協力」に関連する語では、「グループで協力し達成感を得られた」「協力することでチームワークの大切さを学んだ」といった記述が多く見られた。これらから、学生が他者と連携しながら課題を解決し、協働を通じて協調性や達成感を深める経験を得ていたことが読み取れる。

### 3) 共起ネットワーク分析

単語の関連性を可視化することのできる共起ネットワークを利用し分析した結果が図2である。

共起ネットワークの出力に際して、語の最小限数は

「3」と指定した。この図において、円の大きさは、語の出現回数を示しており、語を結ぶ線の太さは共起関係の強さを示している。サブグラフを囲む線については、筆者が加筆した。共起ネットワーク分析の結果、出現数の多い語、かつ強い共起関係をもつ内容として、大きく9つの項目で示された。具体的な記述については、表6に示した。なお、学生の記述内容において、文章表現として不正確な記述が見られた回答については、もとの文章から前後の文脈を判断し、筆者がその内容を訂正した。

また、各項目名については、共起ネットワークの結果および、KH Coderの文書検索から前後の文脈を判断（例えば、第1項目では「リズム」、「合わせる」、「楽しい」などの語の関連が「リズムを表現する楽しさの共有」という意味で使用されていることを確認）した上で、抽出された語の分類と意味の解釈を行った。

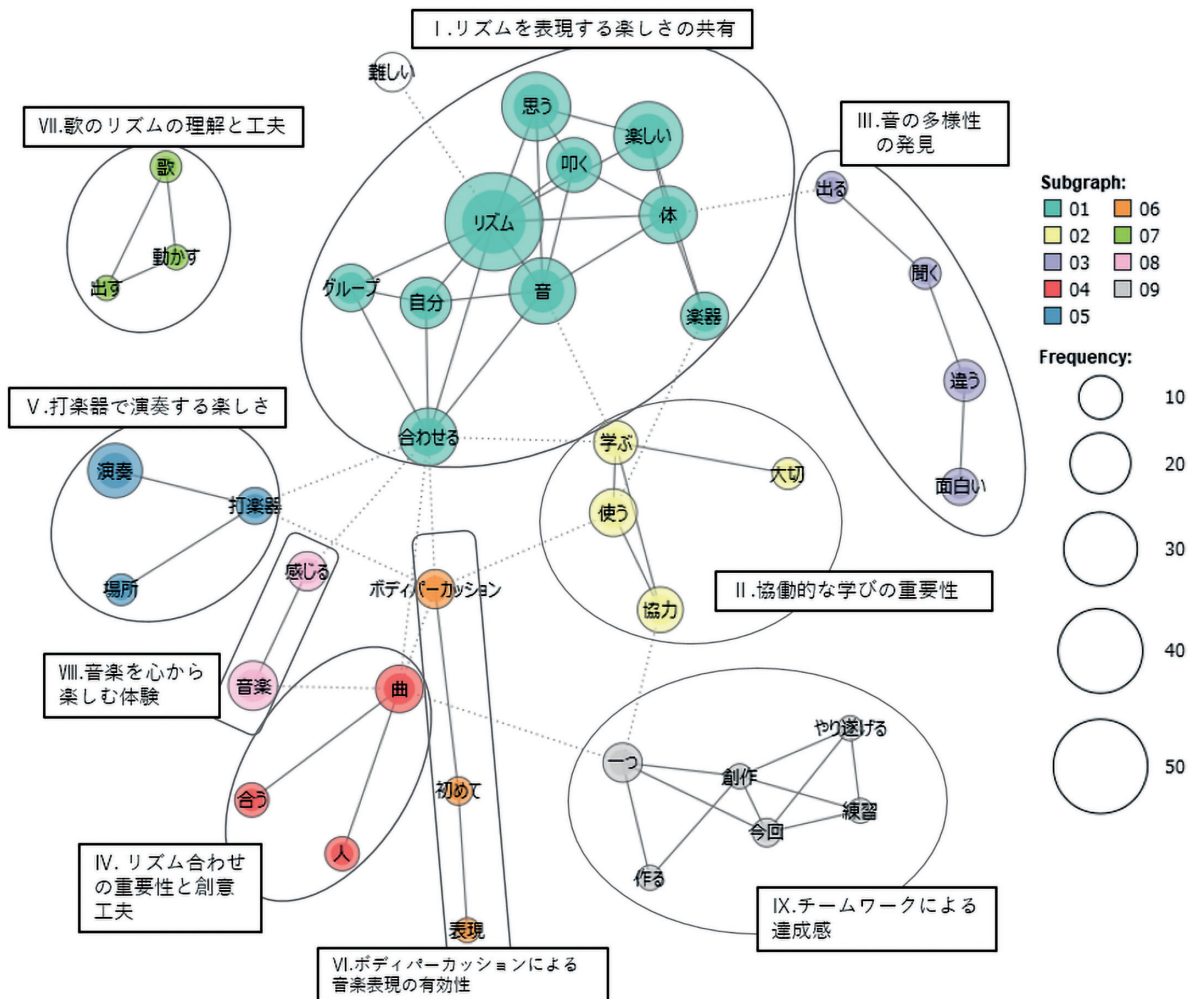


図2 学生の振り返りシートの記述内容に関する共起ネットワーク図

表6 本取り組みにおいて学んだことや感じたことに関する記述内容（一部抜粋）

項目名	学生の記述内容
I. リズムを表現する楽しさの共有	○体を動かして友達とリズムを合わせる楽しさや、体を叩いたりして出す音が場所によって違う面白さを学んだ。○実際に自分でリズムを作ることで、より曲に親しみを感じることができた。○リズム創作をしてみて、音符を詰めたり、休みを作ったりなど、色々なリズムをつなげることによって、一つの曲でもゆったり目に感じたり楽しそうに感じたりし、リズムの大切さを学んだ。○リズムを体や楽器で表現する楽しさを味わった。○歌も楽しくて明るいリズムのものだったので、リズムに乗りながらたたくとより楽しい気分になることができた。○グループで音を合わせてだんだん完成に近づいている時、一体感を感じ、もっと頑張りたいという気持ちになった。
II. 協働的な学びの重要性	○自分一人では難しくても、同じパートの人と合わせたり、グループの人と協力したりすることで新たな発見があった。○みんなで協力することの大切さと音を合わせる楽しさを学ぶことができた。○今回の活動を通して、グループで曲に親しみ、協力して作り上げていくということがとても楽しいことを知った。○みんなでリズムや音を合わせてすることは難しかったですが、協力することによって達成感を味わえた。
III. 音の多様性の発見	○同じ体の部位を叩いてもたたき方によって出る音が全然違うことが分かった。○たたき方によって強弱をつけることができた。○体の打つ場所が違うことで鳴る音や大きさなどが違い、それがとても面白かった。○楽器や体からこんな音が出るんだと、一つ一つの音にワクワクした。
IV. リズム合わせの重要性と創意工夫	○曲を合わせる際には、「セーの」や「1、2、3、4」などみんなで音を揃えるために、声を掛け合うことが大切だと感じた。○リズムがうまく合わないところがあって、何度も挑戦し、少しずつ合うようになってきてまとまりが出てきた。○それぞれ異なるリズムが合わさると、いつもの曲が明るくなったり暗くなったりと変化し、すごいなと感じた。
V. 打楽器で演奏する楽しさ	○ボディパーカッションのリズムを打楽器で演奏してみると強弱がつきやすく、音のレパートリーも増えるので、楽しみながら演奏することができた。○みんなで別々の打楽器を用いて、別々のリズムを合わせて演奏するのが楽しかった。
VI. ボディパーカッションによる音楽表現の有効性	○ボディパーカッションはただで音が出るので、初めてでも簡単に演奏でき、曲や場所に合わせて自由に扱うことができると感じた。○普段、音楽は口や手、指先などを使って楽器で音を出すのが、初めてボディパーカッションを経験し、体を使って全身を動かしながら表現でき、とても楽しかった。○ボディパーカッションの活動をとおして、音楽を自分達で作る楽しさや、その後の合奏の楽しさを感じる事ができた。
VII. 歌のリズムの理解と工夫	○子どもの歌は小さい頃から歌い慣れているけれど、その歌の持つリズムについてあまり集中して聞いたり考えたりしたことがなかったので、子どもの歌のリズムをより詳しく知ることができた。○歌の特徴を生かし、元気いっぱいのところは、短い音を使って跳ねた感じを出してみよう、しっとりとした部分は二分音符など長い音を使ったり、手以外のところを叩いたりして静かな感じにしようなど工夫することを学んだ。○もともとある曲のリズムとどう合わせたら面白くなるのか、曲の雰囲気合うリズムは何かを考える際、今まで自分に馴染みのあるリズムから考え、これまで学んだ曲のことを思い出した。
VIII. 音楽を心から楽しむ体験	○音楽には正解がなく、心から楽しむことで音楽が成り立つと思った。○自分の体を楽器として使いながら、音楽の楽しさやリズム感を体験することができた。 ○友達と一緒に音楽をしたことで、さらに仲が深まったと思った。
IX. チームワークによる達成感	○チームで何かをやり遂げることができるのは、素晴らしい経験だと思った。 ○みんなでリズムや音を合わせてすることは難しかったが、協力することによって達成感を味わえた。○グループ内で協力して練習を重ね、一つのことをやり遂げるといった楽しさを学んだ。○グループみんなで案を出し合ったり、リズムの練習をしたりすることで、より仲が深まったと実感できた。

それぞれの項目内容について、結果および意味の解釈について記述する。

第1項目は「リズムを表現する楽しさの共有」として解釈した。学生の記述から、リズム創作を通して異なるリズムを作り出す面白さや、体や楽器でリズムを合わせながら表現する楽しさを味わった様子が確認された。

第2項目は「協働的な学びの重要性」として解釈した。一人では困難に感じることも、グループで協力することで新たな視点を得ながら克服できたことや、協力して取り組むことで得られた達成感が記述されていた。これらから、学生が協働のプロセスを通じて、一緒に創り上げる楽しさを実感したことがうかがえる。

第3項目は「音の多様性の発見」として解釈した。たたき方や場所による音の違いに気づいたことや、打楽器やボディパーカッションの多様な音色に感動したこと

が記述されていた。これにより、学生は音の多様性を体験し、新たな発見や気づきを得たことが示された。

第4項目は「リズム合わせの重要性と創意工夫」として解釈した。リズムを合わせるための声かけの重要性や、繰り返し練習することでリズムが徐々にまとまりを生む過程が記述されていた。また、異なるリズムの組み合わせによる楽曲の変化や、曲に適したリズムを工夫して選ぶことで、音楽的理解を深めた様子が確認された。

第5項目は「打楽器を演奏する楽しさ」として解釈した。打楽器を使うことで表現の幅が広がることを実感したり、演奏を楽しんだりする様子が記述されていた。

第6項目は「ボディパーカッションによる音楽表現の有効性」として解釈した。ボディパーカッションは初心者でも簡単に取り組める表現方法であり、自分た

ちで音楽を作り上げる楽しさや表現する喜びを体感できたことが記述されていた。これにより、音楽教育における有意義な手段であることが示唆された。

第7項目は「歌のリズムの理解と工夫」として解釈した。歌の特徴に合わせたリズムパターンを創作し、それをつなげたり変化させたりする工夫を通じて、リズム創作を行ったことが記述内容から確認された。

第8項目は「音楽を心から楽しむ体験」として解釈した。音楽を純粹に楽しむことや、仲間と協力して楽しむことで絆を深めたことが記述されていた。音楽の魅力を再発見し、仲間と楽しむことの大切さを学ぶ機会となった様子がかがえる。

第9項目は「チームワークによる達成感」として解釈した。グループで協力し合うことで達成できる喜びや、コミュニケーションを通じて仲が深まる経験が記述されていた。これにより、グループでの成功体験が今後の学びや活動への意欲向上につながったと考えられる。

#### IV. 総合考察

本稿は、子どもの歌を題材としたボディパーカッションによるリズム創作活動を通じて、学生が得た気づきや学びを明らかにし、リズム創作を経て打楽器演奏へ移行する過程が学生の音楽的表現力向上にどのように寄与するかを検証することを目的とした。また、保育者養成におけるボディパーカッション導入の有効性を検討し、音楽表現指導の新たなアプローチを提案することを目指した。

これまでの分析を通じ、ボディパーカッションを取り入れた授業実践が、学生の音楽的表現力や協調性を育む上で一定の成果をもたらすことが示された。

以上の結果を踏まえ、以下の3つの視点から総合考察を行う。

1. ボディパーカッションのリズム創作過程と演奏において得られた学び
2. ボディパーカッションから打楽器演奏へ移行した際の具体的な効果
3. 保育者養成におけるボディパーカッション導入の意義と実践の有効性

これらの視点に基づき、授業実践の成果を振り返り、保育者養成や音楽教育における新たな可能性を考察する。

#### 1. ボディパーカッションのリズム創作過程と演奏において得られた学び

まず、ボディパーカッションのリズム創作と演奏を通じて学生が得た学びについて、4つの側面から考察する。

##### 1) 主体的に協働する力

学生はグループ活動において主体的に意見を出し合い、互いにアイデアを組み合わせながらリズム創作を進めた。「こんなのどう?」「これなら面白いかも」といった意見交換を通して、より良いリズムを作り出すとする姿勢が印象的であった。

特に「ドキドキドン!一年生」や「とけいのうた」のグループでは、初めは戸惑いを見せていた学生も、役割分担や反復練習を重ねる中で協力しながらリズムを完成させた。この過程で、アイデアを調整しながらチームとしてまとまりを作る適応力が養われたと考えられる。

共起ネットワーク分析(Ⅱ.協働的な学びの重要性)では、「協力」「学ぶ」といった語が頻出し、協働による問題解決や達成感の獲得が学びに深く関わっていたことが示された。「一人では難しかったけど、グループで合わせることで乗り越えられた」という記述からも、他者と協力しながら困難を克服するプロセスが、主体的な協働力の向上につながったと考えられる。

##### 2) 音に対する感受性の向上

学生はボディパーカッションや打楽器を通じて、音の違いや響きの面白さに気づき、集中して音を聴き取る力を養った。形態素分析では「音」や「感動」といった語が頻出し、音への感受性や探究心が育まれたことが示唆された。

共起ネットワーク分析(Ⅲ.音の多様性の発見)では、「楽器や体からこんな音が出るんだと、一つ一つの音にワクワクした」という記述から、学生が音の変化や響きに注目しながら感受性を高めたことが読み取れる。また、「音を揃えるために集中するのが難しかった」という声からは、音を注意深く聴き取り、他者の音と調和を図る力が養われたことがうかがえる。

##### 3) 音楽的思考力と創造性

子どもの歌を題材としたリズム創作活動では、学生は曲調や雰囲気に合わせてリズム表現を工夫しながら、音楽的思考力や創造性を高めることができた。

共起ネットワーク分析（Ⅶ.歌のリズムの理解と工夫）では、「歌」や「動き」といった語が抽出され、「曲の雰囲気合うリズムは何かを考える」「歌の特徴を生かす」といった記述が多く見られた。これにより、楽曲分析力や創造的な思考力の向上が示唆された。

また、先行研究では旋律を用いないリズム創作が音楽形式の理解を促すことが示されていたが、本稿では子どもの歌を題材とすることで、曲調や動きを意識しながらリズム構造を理解し、創意工夫を重ねる過程で思考力や創造力が育まれたと考えられる。この力は、保育現場における音楽活動の指導力向上にも寄与する可能性が高い。

#### 4) 自己表現力と共感力の育成

学生はグループごとに、表現したいイメージを具体化するために創意工夫を凝らした取り組みを行った。「アイアイ」グループでは、リズムの変化と休符を活用して躍動感を生み出し、聴き手に楽しさを伝える演奏を実現した。「ドキドキドン！一年生」グループは、軽快なリズムからゆったりしたリズムへの切り替えにより、音楽の流れに緩急をつけた。「おもちゃのチャチャチャ」グループは「ハイ！」という掛け声を取り入れ、会場全体を巻き込む演出で発表を盛り上げた。「とけいのうた」グループでは、落ち着いたリズム表現を通して聴き手と穏やかな雰囲気を共有した。

これらの演奏発表を通じて、学生は自己表現力を高めるとともに、他者の表現を尊重し、共感する力を育んだ。この共感力は、将来の保育現場で子どもたちの個性を尊重しながら活動を進めるための重要な資質として活かされると考えられる。

## 2. ボディパーカッションから打楽器演奏へ移行した際の具体的な効果

ボディパーカッションによるリズム創作から打楽器演奏へ移行する過程において、学生がどのような効果を得たのかについて、以下、3つの側面から検討する。

### 1) リズム感の習熟と演奏の調和

ボディパーカッションを通じてリズムを体で覚えたことで、学生は打楽器演奏時に安定したリズムを再現できた。学生の記述には、「体にリズムが染みついていたのでスムーズに移行できた」「体でリズムを感じ

ながら演奏したのでノリよくできた」といった意見が多く見られた。このことから、体を使ったリズム体験がタイミングやテンポ感を高め、演奏全体の調和を促したことが示唆される。

また、共起ネットワーク分析（Ⅰ.リズムを表現する楽しさの共有）では、「リズム」「体」「楽しい」などの語が頻出し、学生が身体感覚を伴うリズム表現を楽しみながら習熟していった過程がうかがえる。こうした体験は、打楽器演奏への移行を支える基盤となり、調和と安定感のある演奏につながったと考えられる。

### 2) 音色への感受性と表現の探求

ボディパーカッションの創作過程を通して、学生は音色の違いや響きの面白さを探求し、その特徴を活かした表現方法を工夫しながら演奏に取り組んでいた。振り返りシートには、「たたき方を変えると音が違って聞こえて面白かった」「打楽器でも違う音を探すのが楽しかった」といった記述が見られた。このことから、学生はボディパーカッションを通じて音に耳を傾ける姿勢を養い、それが打楽器演奏時にも活かされたことが示唆される。

また、共起ネットワーク分析（Ⅲ.音の多様性の発見）では、「聞く」「違う」「面白い」といった語が抽出され、音の多様性や違いを積極的に探求しながら、その面白さを感じ取っていた様子が確認された。具体例として、「たたく場所によって音が違うのが面白い」「楽器によって音が違うので、それを聞き分けるのが楽しかった」という記述からも、音への感受性が高まり、それを楽しみながら表現力を育てていたことがうかがえる。さらに、「強弱をつけることで曲の雰囲気が変わった」「打楽器では音の響きに耳を傾けて表情をつけられた」といった意見から、学生が音の特徴を活かした表現力を高めていたことも明らかとなった。

### 3) リズム構成への理解と表現力の向上

ボディパーカッションの創作と練習の過程では、学生は曲の構成やリズムの役割を理解するとともに、打楽器演奏時の表現力を高める工夫を行っていた。共起ネットワーク分析（Ⅳ.リズム合わせの重要性和創意工夫）では、「人」「曲」「合う」の語が抽出され、学生がリズムを組み合わせる際に楽曲全体の流れを意識し、他者と連携しながら調和を図っていた様子が示された。

学生の記述には、「異なるリズムが合わさると、いつもの曲が明るくなったり暗くなったりと変化」とあり、リズムの組み合わせによる表現の変化への気づきを示されている。また、「音を揃えるために、声を掛け合うことが大切」との記述からは、他者と協力して表現を調整し、リズムの統一感を高める努力が見られた。さらに、学生は曲調に合わせて表情づけを工夫しながらリズムを創作し、表現力を高める経験を積んでいたことがうかがえる。

これらの成果から、ボディパーカッションは打楽器演奏の質や表現力の向上に寄与し、音楽活動の基盤を育む上で有効な手法であることが示唆された。

### 3. 保育者養成にボディパーカッションを導入することの有効性について

形態素分析および共起ネットワーク分析の結果、最も頻出した語は「リズム」であり、次いで「楽しい」や「思う」といった語が多く見られた。このことから、ボディパーカッションのリズム創作と演奏活動を通して、学生がリズムを体で表現する楽しさや、他者と協力してリズムを合わせる楽しさを体験したことが示された。また、共起ネットワーク分析（I.リズムを表現する楽しさの共有）では、異なるリズムを組み合わせる面白さや、体や楽器でリズムを共有しながら表現する楽しさを味わった様子が確認された。

さらに、この結果は『幼稚園教育要領』や『保育所保育指針』の領域「表現」で重視される「楽しさを味わう」「楽しむ」といった内容と一致しており、ボディパーカッションは表現教育の実践に適したアプローチであると考えられる。学生の記述からも、「自分でリズムを創ることで曲に親しみを感じられた」「楽しさを味わった」といった意見が多く見られ、主体的に音楽の楽しさを体感する経験が得られたことが示唆された。

このように、ボディパーカッションは音楽に親しみながら自己表現を楽しむ体験を通じて、将来、保育現場で子どもたちに豊かな表現活動の楽しさを伝える力を育む手法として有効であることが確認された。

以上、本稿では、ボディパーカッションを活用したリズム創作活動を通じて、学生が得た学びや表現力の向上について検討し、打楽器演奏への移行過程における具体的な効果を分析した。結果として、学生は主体的に協働する力や音への感受性、創造性を育み、自己

表現力と共感力を高めることが明らかになった。また、リズム創作の経験は、打楽器演奏時の表現力や表現の幅を広げる上で有効であることが示唆された。

さらに、保育者養成におけるボディパーカッション導入の意義についても検討し、その有効性を示した。これらの結果から、保育者養成や音楽教育における指導法の新たなアプローチとして活用できる可能性が示唆された。

## V. おわりに

本稿では、ボディパーカッションを活用したリズム創作活動を通じて、学生の創造性や音楽表現力の向上に焦点を当てて検討した。記譜やリズム創作における課題を改善し、実践的な学びを深めるための提案も行ったが、今後の課題として以下の2点が挙げられる。

一つ目は記譜に関する課題である。グループによっては、記譜の正確さや拍の整合性に差が見られた。また、言葉によるリズム表記を用いたグループでは、記譜能力に個人差があった。これらを改善するためには、音楽理論の基礎指導や段階的な記譜練習が求められる。しかし、音楽理論に関連する授業時間には制限があるため、記譜ソフトなどのデジタルツール（例：MuseScoreやFinale、Sibelius、スコアメーカーなど）の活用が有効であり、記譜スキルの向上だけでなく、グループ作業やICT活用への視野も広がることが期待される。

二つ目は、学んだ内容を子どもとの関わりに活かすための検討である。模擬保育や実習を通じて、具体的な指導法や声かけの工夫を検討し、音楽活動への応用を重ねる必要がある。また、本稿では授業時の観察に留まったが、ボディパーカッションは音楽経験を問わず学びや気づきを得られる手法であることが示唆された。一方で、リズム譜の記載や演奏習熟度には個人差があり、経験の有無や演奏歴が影響する可能性も考えられる。今後は事前アンケートやヒアリングなどを活用し、学生の背景に応じた指導法を検討する必要がある。

これらを踏まえ、今後も学生の創造性や音楽表現力を育む授業づくりをさらに検討していきたい。

## 参考文献/引用文献

- 1) 文部科学省 (2018)『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、p.233。
- 2) 厚生労働省 (2018)『保育所保育指針解説』フレーベル館、p.168。
- 3) 前掲書1)、p.238。
- 4) 前掲書1)、p.240。
- 5) 前掲書2)、p.170。
- 6) 前掲書2)、p.173。
- 7) 山田俊之 (2018)『保育園・幼稚園deボディパーカッション&リズム遊び』明治図書、p.18。
- 8) 山田俊之 (2011)『ボディパーカッションdeクラスづくり』明治図書、p.9。
- 9) 佐藤須美子 (2008)「中学校音楽科における『ボディ・パーカッション』の意義とその活用」『広島文化短期大学紀要』41、pp.77-88。
- 10) 同上、p.89。
- 11) 岡崎裕美 (2017)「保育者養成における身体表現・音楽表現の学習の必要性～グループ研究を通しての学習成果～」『千葉敬愛短期大学紀要』39号、pp.374-377。
- 12) 山路麻佳 (2022)「保育者養成におけるリズム感を養う指導法について」『西南女学院大学紀要』26巻、p.126。
- 13) 塩田桃子・平山裕基・星川佳加 (2020)「保育者養成校における民舞『荒馬』に関する研究— 領域『表現』の指導及び教育方法論との関連に着目して—」『創発大阪健康福祉短期大学紀要』第19号、pp.17-30。
- 14) 上原由美 (2023)「3歳未満児クラスの保育実習における『手作りおもちゃ』の活用—保育者養成課程の『乳児保育I』を通して—」『保育文化研究』第17号、pp.152-155。

## 参考楽譜

- 1) 小林美実監修・井戸和秀編 (1982)『こどものうた100』チャイルド本社、p.41。

# A Consideration on the Effectiveness of Rhythm Creation Using Body Percussion in Early Childhood Educator Training

Nagashima kana\*

## Abstract

This paper aims to elucidate students' insights and learning through rhythm creation activities using body percussion based on children's songs, and to examine the impact of transitioning from rhythm creation to percussion instrument performance on enhancing musical expressiveness. The analysis employed musical score and composition process analysis, content analysis of free descriptions, and quantitative text analysis of reflection sheets.

The results revealed that body percussion is accessible to students regardless of their musical experience, fostering collaborative skills, sensitivity to sound, and creativity, while also improving self-expression and empathy. Furthermore, the study suggested that experience in rhythm creation is effective in expanding expressiveness and range of expression when playing percussion instruments.

Moreover, experiencing the joy of collaborative learning through rhythm creation activities proves to be an effective method for developing the ability to convey rich expressive activities to children in childcare settings. The findings of this paper suggest potential applications as a new teaching method in early childhood educator training and music education.

Key words: body percussion, rhythm creation, children's songs, expressiveness, content analysis